

地域看護学専攻科学生の公衆衛生看護研究の動向

福岡 悦子*

1) 地域看護学

(2008年11月12日受理)

新見公立短期大学地域看護学専攻科修了生過去4年間(62編)の公衆衛生看護研究(卒業研究)の取り組みと指導上の課題を明らかにするために研究内容を分析した。分析内容は研究テーマ、対象者、方法、キーワードである。テーマの分析では在宅看護(高齢者)が36%と最も多く、次いで成人保健(産業保健を含む)29%、学校保健21%、母子保健11%、その他3%であったが、広範囲にわたっている。テーマの動向を1-2期生と3-4期生で比較すると、成人保健・在宅看護はほとんど変化がみられなかったが、母子保健と学校保健は3-4期生に多くみられた。方法ではアンケート調査(84%)が最も多く、半構成面接によるインタビューが11%、文献研究5%であった。キーワードでは生活習慣が26%、高齢者が25%、育児関連が16%、高校生が10%等であった。テーマ・対象者・キーワードともに高齢者が多く、少子高齢化の進んだ過疎地域という大学の所在する地域の特徴を表している。

(キーワード) 卒業研究テーマ、高齢者、母子保健、学校保健、成人保健

はじめに

新見公立短期大学地域看護学専攻科は2004(平成16)年4月に開設された1年課程の保健師養成コースである。定員15名は特別選抜(本学看護学科卒業生)7名と一般入試8名である。受験資格は開設当初は短期大学看護学科および3年間の看護専門学校卒業生に限られていたが、2006(平成18)年の3期生から5年一貫教育の高等学校の要望に応え、また2007(平成19)年の4期生からはさまざまな看護教育を受けたのち看護師の資格があれば受験できるように門戸開放している。

2008年(平成20)3月、第4期修了生16名を含み総勢で62名が巣立って行った。公衆衛生看護研究(以下、研究とする。)は通年2単位60時間で、入学当初から各自の興味ある分野やテーマで研究を行っている。岡¹⁾らは、学生時代に看護基礎教育で『看護研究経験したことが良かった』と回答した者は全体で92.6%と高かったと述べている。地域看護学専攻科でも、岡²⁾らが述べているように研究過程を学び研究的態度を育成することを目標に熱心に取り組んでいる。

今回、修了生62名の研究を対象に、学生の関心分野や研究プロセスについて分析を試みた。学生の研究への取り組みの傾向を明らかにすることで今後の指導の示唆を得ることが目的である。

I. 研究目的

地域看護学専攻科修了生の過去4年間の研究を分析することで、研究への取り組みと指導上の課題を明らかにする。

II. 研究方法

1. 分析対象

地域看護学専攻科修了生62名の研究論文を分析対象とした。

2. 分析方法

- 1) 1期生から4期生までの研究をそのテーマの類似性で分類し経年変化をみた。
- 2) 研究対象者をその類似性で分類した。
- 3) 研究方法の分析を行った。
- 4) キーワードからその類似性で分類し動向をみた。

ただし、キーワードの分析は論文中に明記している3期生・4期生の論文に限る。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮については、「公衆衛生看護研究集録集」として公表された論文を対象とし、個人が特定されないよう配慮した。また、論文使用については、卒業生への学報「まんさく」発送時に本研究の目的・趣旨および拒否の方法についても明記した説明文書を同封した。使用拒

*連絡先: 福岡悦子 地域看護学専攻科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

否の意志表示はなかった。

Ⅲ. 専攻科卒業研究の概要

1. 科目の目的

公衆衛生看護における研究課題と技法について実践的に理解する。実習等の実践活動事例をとおして地域で生活している様々な健康レベルにある個人とその家族を対象に保健活動における保健師の機能、役割等を研究的に考察し、自己の公衆衛生看護観（地域看護観）を深めるとともに専門職業人として必要な研究活動の基盤をつくることを目的としている。

2003年（平成15）10月10日、厚生労働省健康局長から「地域における保健師の活動指針」³⁾が出された。この指針では別紙において都道府県保健所は「地域の健康状況の収集、分析および提供を行うとともに調査研究を実施し、各種保健計画の策定に参画し・・・」と明記されているとおり、研究は重要な科目である。

2. 教育方法

入学式の案内の送付時点から学生の興味ある分野や研究テーマを選定するように伝えておく。単位は通年2単位60時間である。

学生は定員7名の本学出身者、定員8名の一般入試合格者計15名である。学生は看護師としての経験を有する者が毎年約30%を占めている。2006年の3期生から5年一貫教育の高等学校、さまざまな看護教育を受けた後に看護師の資格があれば受験できるように門戸開放している。したがって学生は入試に合格した学力はあるが入学当初は考える力、書く力は様々である。教員には学生の能力に応じた指導方法が求められる。学生の研究テーマにより担当する専任教員を決定している。3名の教員の主な分野は次のとおりである。1名は産業保健・成人保健・職業性ストレス、1名は母子保健・学校保健・成人保健、1名は在宅を主とした高齢者、介護保険、ケアマネジメント等である。

担当する教員が決まったあとはゼミ形式でそれぞれの教員が指導にあたっている。最初に年間の研究プロセスを示すとともに、ゼミ以外でも時間が許す限り相談にのることを伝えておく。研究計画書作成時から学生のテーマや内容にそった先行文献を取り寄せることの意義を十分説明し、仮説を立てることに重点をおき何度も何度も考えることからスタートしていく。ゼミは担当学生とグループワークを交えながら行う方法を取り入れている。

筆者が担当した学生は全員アンケート調査であった。アンケート調査は原則的には地元で行うこととしている。ほとんどの学生は短い夏休み中（8月の約3週間）に調査票配布・回収・データ入力を行う。9月から3週間保健

所・市町村実習があるため、10月に入るとSPSSを使用した単純集計を行い、遅くとも10月末から考察に取り組むため、単純集計後は直ちに結果の記述を勧めている。論文の形になったところで学生と担当教員の論文のキャッチボールがスタートする。学生の文章を大切にしたいので、できるだけ学生に考えさせることを重要視し、10数回の論文の往復で段々内容が良くなっていくプロセスを学生と共有している。最初は結果と考察が入り混じることが多い。そのため結果と考察をはっきり分けること、先行文献を充分活用して考察を書くことに重点を置いて指導している。2期生から論文の提出2-3日前までにゼミの仲間で論文を互いに読みあうという査読方式を導入した。互いの学生が気づいた部分をアドバイスし論文の再修正をしている。この方法は査読の時間を前倒しして継続している。

福岡ゼミでは教員が疑問に思う部分に下線を引き、学生に十分考えさせるよう努めている。ねらいは学生に論理的に論文を書く力をつけることである。したがって、教員が赤字で添削し、学生がそれを単に書き直すだけにならないように特に注意して論文指導をしている。研究はほとんどの学生にとって苦手な科目であるが、学生およびゼミの仲間と教員の協力で完成した論文はどの学生にとっても達成感があり、今後の力の源となるものと考えられる。

3. ガイダンスの内容

研究のガイダンスは4月に授業の目的や研究の動向と意義・方法・プロセスについての説明、論文作成の方法と文献学習、研究課題の発見、研究計画作成と研究論文作成について計4コマを開講している。

発表はパワーポイントを用いて行っている。

本学専攻科は2005年（2期生）度の修了生から独立行政法人大学評価・学位授与機構より学士の学位認定の専攻科に認定された。したがって学位申請時には研究論文の文字数と行数を変更するだけで申請に対応できるようにしている。

4. 研究のプロセス

表1に4期生までのすすめ方の時期を示す。5期生から必要な場合は審査委員会に申請することとしている。

毎年12月初旬に最終論文を提出した後は、公衆衛生看護研究発表会に向けて学生が主体的に抄録集の作成、発表当日の役割など発表に関する様々な計画をして発表日を迎えている。1期生・2期生の集録集は“とじたくん”を使用した手作りであったが、3期生から業者に委託している。

表1 研究の進め方の時期

時 期	具 体 定 期 内 容
4 月	入月当初から希望テーマ選定を伝える
	研究の講義を行い段取りを説明
	学生の希望テーマ提出
	担当教員決定
5 月連休明け	テーマの決定および研究計画書の作成
	参考文献の収集開始
5 月末	研究計画書完成
	アンケート原案作成
6 月末	アンケート依頼に出かける
	必要により倫理審査申請（5期生から）
7 月～8 月	アンケート調査実施
8 月（夏休み中）	エクセルに入力
8 月末から 9 月末	統計パッケージ使用による解析
11 月末	論文締め切り
12 月第 1 週	論文修正
12 月第 3 週	公衆衛生看護研究発表会

IV. 結果

1. 研究テーマの分析

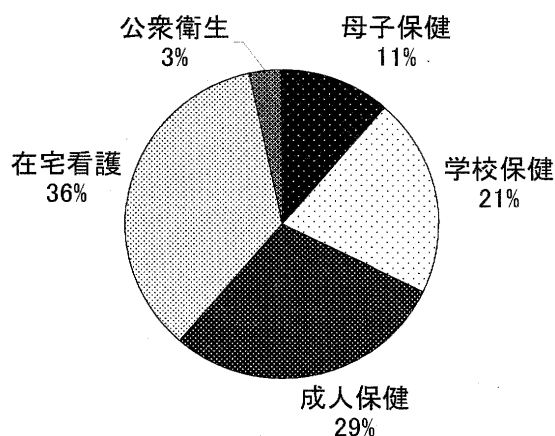


図1 テーマの分類

図1が示すように、研究テーマはライフサイクル別に母子保健、学校保健、成人保健（成人保健と産業保健）、在宅看護の4分野と公衆衛生に分類された。在宅看護が22編（36%）と最も多く、次いで成人保健（成人保健と産業保健を含む）18編（29%）、学校保健13編（21%）、母子保健7編（11%）、公衆衛生2編（3%）であった。

表2にテーマの具体的内容を示した。

1) 母子保健について

1期生、2期生は母子クラブ、幼児クラブに関するも

のが各1編であったが、後半の2年は孫育て支援1編、乳児健診で求めること1編、育児不安に関すること2編であった。里親制度に関するテーマも1編みられた。核家族化が進み、育児に関する不安は重要な問題であることが窺われる。

2) 学校保健について

学童期に関するもの6編、中学生に関するもの2編、高校生に関するもの5編を含み13編であった。

高校生に関するものでは、2006年（平成18）度の3期生から地域看護学専攻科の受験資格を拡大し、5年一貫教育の卒業生等に門戸開放した。その結果5編のうち3編が5年一貫教育出身校でのアンケート調査であった。また、2007年（平成19）の4期生には性教育に関するものが2編みられた。

3) 成人保健について

今回成人保健と産業保健に関するものを統合し成人保健とした。成人保健は大学生に関するものが4編と健康診断に関するものが2編であった。産業保健は12編であった。12編のうち喫煙に関するものが6編と半数を占めていた。

4) 在宅看護について

高齢者に関するものを在宅看護とした。20編の高齢者に関するものと2編の関連するものを含む。高齢者に関するテーマは毎年1編から3編の取り組みがあった。地域看護学専攻科開設時にみられたデイサービス、高齢者虐待、要介護認定、介護負担は2006年（平成18）以降1編もみられていない。代わってソーシャルサポートに関するもの、高齢者と幼児の交流が加わっていた。

5) テーマの範囲

乳幼児から高齢者まで文字通り「ゆりかごから墓場まで」の広範囲にわたっている。

6) 保健師の専門性を扱ったテーマこそ少ないものの、すべての論文は保健師活動の範疇にあり、また各学生の論文中には保健師の役割について記述されている。

7) テーマからみた動向

テーマの動向を1-2期生と3-4期生で比較したところ、成人保健・在宅看護はほとんど変化がみられなかったが、母子保健と学校保健は3-4期生に多くみられた。

2. 研究対象の分析

研究対象の分析は図2に示すとおりである。

1) 62編の論文のうちもっとも多かった在宅看護20編の対象は、地域の一般高齢者を対象としたもの10編（50.0%）と要介護認定を受けた高齢者を対象としたもの5編（25.0%）に大きく分類され、その他が5編であった。

2) 労働者では市役所職員1編、一般企業労働者7編、病院職員3編、養護教諭1編の計12編であった。12編の内

表2 年度別テーマの内訳

		2004	2005	2006	2007	
		15人	15人	16人	16人	計
母子保健	母子・幼児クラブ	1	1			2
	孫育て支援			1		1
	乳児健康診査で求めること・育児不安				3	3
	里親制度			1		1
学校保健	小学生の生活習慣	2				2
	児童虐待			1		1
	登下校中の安全			1		1
	食生活とむし歯の関連性	1				1
	学校保健と地域保健の連携			1		1
	思春期の睡眠		1			1
	農作業が食意識に与える影響		1			1
	高校生の生活習慣			1	1	2
	(高校生の) 精神障害に対するイメージ			1		1
	性教育				2	2
成人保健	喫煙に関するもの		1		1	2
				1		1
			1			1
		1			1	2
	産業保健	3	1	1	1	6
		1	1			2
				1		1
					1	1
在宅看護	職業性ストレス		1	1		2
		1	2	3	2	8
		1				1
		2				2
		1	1			2
			2			2
			1	1	1	3
					1	1
				1		1
		1				1
公衆衛生	透析患者				1	1
	健康危機管理				1	1
	健康危機管理				1	1
	ごみ問題		1	16		1
		15	15	16	16	62

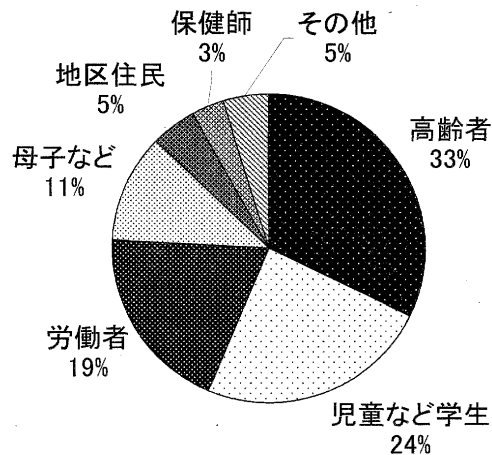


図2 対象者の分類

容は「喫煙」6編、「口腔保健」2編、「生活習慣関連」1編、「睡眠関連」1編、「職業性ストレス」2編であった。

3) 学生では小学生3編、中学生2編、高校生6編、看護学生1編、大学生3編の計15編であり、内容は生活習慣に関するものでは「小学生」2編、「高校生」2編であった。「性教育」2編をはじめ様々な内容であった。

4) 母親を対象としたものでは母子クラブ参加、幼児クラブ参加、1歳6か月健診・3歳児健診受診、公立保育所を利用、3歳児までを持つもの各1編、その他として園児、幼児、児童の保護者、里親が各1編の計7編であった。

5) その他として地区住民3編、保健師2編、健康増進施設利用者、児童の安全対策に取り組む人達、血液透析患者が各1編であった。

3. 研究方法からの分析

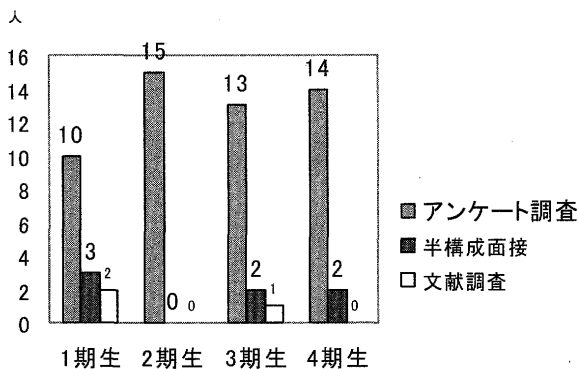


図3 研究方法による分類

62編のうち図3が示すように、アンケート調査52編 (83.9%)、半構成面接によるインタビュー7編 (11.3%)、文献調査3編 (4.8%) であった。

半構成面接を取り入れたインタビュー調査は2期生を除いて毎年2-3編取り組まれている。本学出身以外の学生は看護学生時代に質的研究や事例研究を行ってきたので、地域看護学専攻科で初めてアンケート調査に取り組む学生が多い。保健師に求められる調査研究能力を訓練するためには、地域集団を対象に分析する方法としてのアンケート調査が適していると思われる。様々な角度から分析する能力や技術を得ておくことは行政に勤務した時ばかりでなく、いずれの分野で就職しようともすぐに役立つため、研究には重点をおき丁寧な指導に取り組んでいる。

4. キーワードの分析

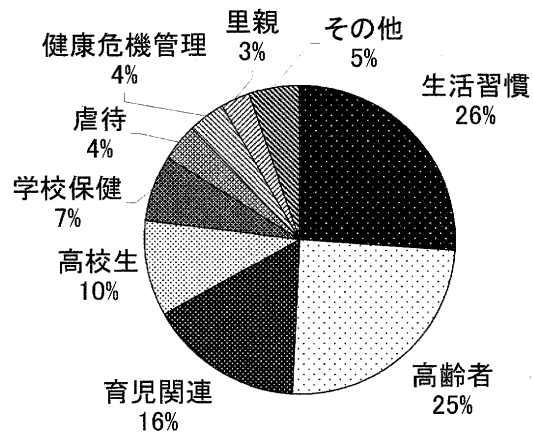


図4 キーワードの分類

3期生、4期生のキーワードは132件抽出された。そのうちキーワードにアンケート調査を用いた2件を対象から削除し130件を分析した。

図4が示すように、生活習慣に関するもの34件 (26%)、高齢者に関するもの32件 (25%)、育児に関するもの21件 (16%)、高校生13件 (10%)、学校保健に関するもの9件 (7%)、虐待に関するもの5件 (4%)、健康危機管理に関するもの5件 (4%)、里親に関するもの4件 (3%)、その他7件 (5%) であった。

V. 考察

1. 研究プロセス

1) テーマ選定

学生は入学当初から各人の興味ある分野での研究をスタートさせている。看護学科での研究を更に深めたい学生、新たな興味ある分野に取り組む学生など様々である。5月の連休明けをめぐりにテーマを決定する方針であるが、毎年テーマが絞られず悩む学生がいる。

その場合は学生とディスカッションを重ね学生自らテーマを選定できるよう支援していく。テーマ選定から計画書を仕上げるまでの期間が約1か月と短い。古城⁹⁾らは研究テーマの提出から計画書を仕上げるまでに1か月余りという短期間の中で、仮説の設定や研究方法の選択、先行文献のクリティークなどの時間が十分とれないことが大きな課題であると述べているが、本学地域看護学専攻科でも同様の課題がある。この課題に対処するため4期生から入学式の案内発送時点から興味ある分野や研究テーマを選定するよう伝えていたが、5期生から入学式の案内とともに地域看護学専攻科での1年間のスケジュール表を同封し、卒業研究テーマの選定を課題とし、入学直後から取り組めるようにしている。

研究テーマは在宅看護（22編）、産業保健を含めた成人保健（18編）、学校保健（13編）の計53編（86%）でほとんどが占められている。母子保健は7編（11%）である。2期生で環境問題、4期生で健康危機管理に各1編取り組んでいるが、公衆衛生に関するテーマは2編にとどまっている。テーマに在宅看護や成人保健が多いのは、これまでの経験から取り組むテーマとして選定しやすいことが考えられる。逆に公衆衛生に関するテーマが少ないのは看護専門学校あるいは5年一貫教育でのカリキュラムの中に公衆衛生に関する講義は少なく、憲法第25条⁹⁾に公衆衛生は国の社会的使命として明記されているものの公衆衛生を十分理解し、興味を持つ機会がほとんどなかったことが影響しているものと思われる。しかし、研究テーマは乳幼児から高齢者まで文字通り「ゆりかごから墓場まで」の広範囲にわたっている。これは平山⁶⁾らによると、公衆衛生看護の目的・目標は地域社会に住む人々の健康レベルの向上であり、対象は「すべての人々」であることをまさに表しているといえる。最近では世界的な地球温暖化への取り組み、ゴミ問題、あるいは平成17年6月に食育基本法が制定され、食の安心・安全が叫ばれている。今後は地球環境・健康危機管理などの公衆衛生に関するもの、食育、国際交流、障害者に関するもの、保健師としての専門性に特化した視点での研究テーマが望まれる。

2) 研究対象

高齢者を対象としたものが20編であった。高齢者を対象とするテーマが多いのは2000年（平成12）4月から介護保険制度が施行され⁷⁾、保健・医療・福祉の連携がますます重要となり、保健師には調整や企画、政策への参画等の機能が一段と求められるようになっていくことが考えられる。また、高齢者は、看護学科あるいは専門学校の様々な機関での実習で触れ合う機会が多いことも対象として選定しやすいことが考えられる。少子高齢化が指摘されて久しいが、本学の所在地域の2007年（平成19）の高齢化率は33.7%⁸⁾を示し岡山県の

第6位である。因みに全国平均は21.5%、岡山県平均は23.6%である。少子高齢化の過疎地域という地域の特徴が影響しているとも考えられる。

次に児童、生徒、学生を対象としたものが15編、労働者を対象としたものが12編であった。労働者対象の12編は「喫煙」6編、「口腔保健」2編、「生活習慣関連」2編、「職業性ストレス」が2編であり、喫煙に関するものが半数を占めている。2004年（第1期生）は15名中3名と実に3分の一の学生がテーマに選んでいた。喫煙状況の国際比較⁹⁾（2003年）によると、日本人の喫煙率は先進諸外国と比較し高いといわれていたが年々減少傾向にある。2000年には21世紀の国民健康づくり運動（健康日本21）がスタートし、その9つの対象分野の中に「たばこ」が明記されたため喫煙に関するテーマが選ばれやすい状況にあったことに加え、2003年（平成15年）5月に施行された「健康増進法」の第25条で「受動喫煙の防止」が謳われたため取り組みやすかったと思われる。

2. 今後の指導上の課題

1) 先行文献の収集

1年課程の保健師養成コースであるため学生は超過密スケジュールである。課題、演習、自己学習、健康教育、グループワーク、実習（保健所、市町村）、母子・高齢者を対象とした継続家庭訪問、研究、さらに2005年（2期生）から学生の科学的能力を養うために疫学調査を実施している。疫学調査はグループ研究であるが最終的には論文として提出を求めている。したがって各人の論文を含めて2題の研究をすることとなる。

連休明けから先行文献の収集を指導しているが、入学当初学生はその意味を十分理解できず考察作成に当たってあわてることが多い。文献収集がスムーズにいかない現状をみると、看護学生時代に論文作成に関わっていなかった学生は論文作成時に先行文献を収集する意味が十分できていないことが考えられる。そこで今後は入学直後から“論文を読む訓練”のため、教員が良いと薦める論文にふれ、論文に慣れることが重要である。そのためには2本でも3本でも良い論文を読ませ、論文に慣れさせることの導入が必要と思う。また、できれば分野ごとに各教員のお薦めの論文ファイルを準備しておくことも指導上重要なことと考える。5期生にはこの点の理解を深める努力をしているが、今後はさらに研究に関する年間スケジュールをきちんと立て、文献収集に関しても今以上にきめ細かく指導していく必要がある。

2) アンケート調査の実施場所

高齢化率の高い地域で全ての学生が調査することは不可能である。そのためアンケート調査の場合は基本的には地元で行うように指導している。学生はアンケ

ート調査の協力を頂くということに関して安易な考えを持っているように感じられる場合がある。その時には調査の目的、方法、対象者、実施場所、倫理的配慮などについて学生と十分なディスカッションを重ね、学生が自己決定した場所で協力をしていただけよう支援している。逆に、本来は産業現場でのアンケート調査を希望していても行政や企業にアンケート調査を依頼するのは無理だと最初から諦めてしまう学生もある。そこで母校の高等学校や看護学校などに依頼することとなる。出身校であれば学校の協力が大変得やすいものである。苦肉の策として筆者の産業看護職の友人にお願いする場合もある。

協力いただいた先方様には論文を持参または送付し丁寧に感謝の言葉を伝えとともに、場合によってはA3判1枚程度にまとめたものと一緒に差し上げるように指導している。

入学式の案内とともに研究のテーマについては事前に考えて入学して欲しいと伝えているが、今後はアンケート調査の場合は、フィールドとしての場所の確保も視野に入れていく必要があると考える。

3) 指導方法

15人の学生は今まで受けてきた看護教育課程がさまざまである。これまでの国家試験対策として「覚えること」の得意な学生、物事を考えたり文章を書くことを苦手としている学生、逆に発想の豊かな学生、コミュニケーション能力の豊かな学生、イラストの上手な学生など人それぞれである。したがって、指導教員には研究計画作成時から個々の学生に応じた指導方法が求められる。筆者は保健婦学校時代の某恩師から「教育は待つことである」と教えられ、恩師に指導して頂いた方法を真似しながら指導に当たっている。学生にできるだけ考えさせることを主眼にしているため時間がかかるが、学生個々人の将来に備え学生の目線と一緒に考えていく方向を継続していきたいと考えている。

4) グループ内での論文の査読

2期生から提出前にグループ内で査読する方法を導入した。当初は提出直前にしていたため学生が混乱を招くことにつながってしまった。そこで、早めに互いに査読する方法に切り替えた。担当教員の視点とは異なるコメントが出ることや、学生が余裕を持って論文修正ができるようになったことは利点である。学生はグループワークをとおした授業に慣れているので、自分の考えとは異なる他の学生の意見を素直に聞き入れ、自分の言葉にしていく力が付いてきたと思われる。グループ内での査読は今後も継続していく必要がある。

VI、研究の限界

本研究は地域看護学専攻科学生の卒業研究テーマと対象者、方法・キーワードを用いて分析したものであり、研究背景等の分析までには至っていない。今後は研究に至った背景、本学既卒者と本学看護学科からの進学者との取り組むテーマの比較、あるいは5年一貫教育卒業者と他の専門学校卒業者との比較を行うなど今回とは異なる視点での分析を行い、新入生の研究テーマ取り組みへの支援となるようにしていきたい。

引用文献

- 1) 岡宏美, 栗本一美, 木下香織, 古城幸子: 看護基礎教育「看護研究」の卒後の研究活動への役立ち－過去5年間の卒業生を対象とした調査から－, 新見公立短期大学紀要, 27, 117-121, 2006
- 2) 前掲 1) 117
- 3) 厚生労働省健康局長: 地域における保健師の活動指針, 最新地域看護学総論, 日本看護協会出版会, 355-358, 2007
- 4) 古城幸子, 木下香織, 栗本一美, 岡宏美: 3年課程看護学生の「看護研究」への取り組みと教育評価－本学の2000年から2004年の5年間の分析, 新見公立短期大学紀要, 26, 51-60, 2005
- 5) 池田信子, 漆崎育子, 金川克子, 新藤京子, 平野かよこ: 保健師業務要覧, 日本看護協会出版会, 16, 2007
- 6) 平山朝子, 宮地文子, 北山三津子, 小川三重子, 渡辺裕子: 公衆衛生看護活動の目的, 公衆衛生看護学体系1, 公衆衛生看護学総論1, 日本看護協会出版会, 4, 2005
- 7) 津村智恵子: 地域看護学, 中央法規, 94, 2003
- 8) 岡山県の高齢者(65歳以上)の市町村別状況(平成19年10月1日現在) http://www.pref.okayama.jp/soshiki/detail.html?lif_id=9870 2008.09.13アクセス
- 9) 厚生の指標臨時増刊: 国民衛生の動向, 91, 2008

Trends of Public Health Nursing Researches by Students of Community Health Nursing Course

Etsuko FUKUOKA

Summary

This is an analysis of public health nursing researches done by 62 students of Community Health Nursing Course of Niimi College in four years. This is intended to clarify the issues in instruction. I analyzed themes, objects, methods and key words of the researches. The most popular topic is nursing care at home (for elderly people) accounting for 36 %, followed by adult health including industrial health (29 %), school health (21 %), maternity health (11 %) and others (3 %). Topics regarding maternity health and school health are more frequently seen in latter two years. Questionnaire is the most popular methods (84 %), followed by half-constructed interviews (11 %) and literature researches (5 %). The most popular key words are: life habits (26 %), elderly people (25 %), raising children (16 %), and senior high school students (10 %). Researches having elderly people as themes, objects and/or key words are often seen. It shows the demographic and geographic characteristics of the site of this college where depopulation and aging of population progress.

Keywords: themes of graduation theses, elderly people, maternity health, school health, adult health